

特集1 みなとびあのコロナ禍での取り組み

田嶋 悠佑

昨年二月二十九日、私は当館のボランティアに応募したみなさんに、常設展示室の解説研修をしていました。お昼になるうかという時、他の職員が常設展示室に走ってきて「新潟県内で新型コロナウイルス感染者が確認されました。研修は一旦中止します」と告げました。あれから一年以上が経ちました。新型コロナウイルスとの戦いは、いまだ終結の見通しが立っていません。

新型コロナウイルスが国内で初めて確認されたのは二〇二〇年一月十五日ですが、新潟市内では二月に入ってマスクやアルコール消毒液などの入手が困難になったものの、二月二十九日まではいまだ大きな混乱はなかったように思います。

県内での新型コロナウイルス感染確認により、県の文化施設が二週間の休館を発表するなど県内で一気に緊張感が高まりました。みなとびあは、休館こそしなかったものの、二月二十六日に政府から出されたイベントの二週間自粛要請が相次いで延長され、三月二十一日に予定されていた『復活！白山詣で〜江戸時代の古町の賑わい再現』行列や館長講座などのイベントが中止となりました。みなとびあでは、四月に入って企画展「いっぴん」を開幕することができたものの、

感染抑制のための「緊急事態宣言」が全国に発令され、四月二十一日から三週間休館しました。

緊急事態宣言下では、館内へのアルコール消毒液の設置をはじめ、飛沫拡散防止やソーシャルディスタンス確保のための設備を設置しました。

また、新型コロナウイルス感染拡大で利用者の来館が困難になったため、インターネットを用いたコンテンツの配信を行って、博物館の活動のアピールを行う試みを始めました。

まず、三月には外出が難しくなる中、ツイッターを利用した館蔵資料の公開や「古文書クイズ」の出版の試みを行いました。ツイッターは、ツイッター社の提供するソーシャル・ネットワーク（SNS）で、一四〇字までの短文や画像などの「ツイート」という投稿ができます。二月末には、先んじて休館に追い込まれていた関東地方の博物館などがツイッター上で「エア博物館」「おうちミュージアム」と題し、博物館の資料や活動を紹介する活動を始めました。みなとびあでは、二〇一〇年からすでにツイッターを開始しており（<https://twitter.com/minatopia>）、三月三日から博物館の紹介などを始めました。ツイッター上で活動の一つ、「古文書クイズ」をここで紹介します。

の試みは、古文書のくずし字画像をクイズとして出題し、翌日回答を出すというものです。対象はくずし字を勉強していない方から、初学者を想定していました。博物館の情報を一方的に提供するだけでなく、閲覧した方々に考えてもらえるような試みで、休館日を除き二週間毎日継続しました。なお、このクイズは、古文書のくずし字辞書などを手掛ける柏書房のツイッター（<https://twitter.com/kashiwashobo>、二〇二一年三月二十四日閲覧）が、以前行っていたクイズに着想を得ています。

ツイッターは投稿がしやすく、すぐ情報を出せるのが利点です。しかし、情報をさかのぼって閲覧するのが難しく、またホームページに比べると、利用していない方には少し敷居が高いなどの難点があります。

四月に入り、緊急事態宣言が出されるとみなとびあの活動も著しく制限されました。その中で、ホームページ上で「おうちミュージアム」公開に向けた活動が始まりました。この試みは休校中の子どもたちに向けて、北海道博物館が始めた取り組みで、賛同した全国二二〇の博物館が共通のロゴマークを使いながら、各館のホームページ上でコンテンツを展開しているものです。当館では、ホームペ

ージ上で、ツイッターと同様に資料の公開を行うほか、すぐろくの画像データなど、子どもたちが印刷して家庭内で遊べるような情報も提供しました。また、「おうちミュージアム」と平行して、みなとびあでは所蔵している明治時代の古写真や江戸時代の古文書などをまとめて、「おうちみなとびあ」として公開しました。これらは、ツイッターと異なり、ホームページ上で情報を整理して提供しているため、さかのぼって資料情報などを見ることができず。

五月に入ると、同三日に政府から感染のリスクが低いとされた博物館な



おうちみなとびあ

どを、まず再開してもよいことが発表されました。みなとびあは緊急事態宣言が解除された五月十二日から再開し、企画展は期間を延長して開催するなど、徐々に館活動を正常化させていきました。

他にも、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、以前と異なる対応をしていることもあり。例えば、来館者にはマスクの着用を呼びかけ、職員もマスクを着用して対応をしています。展示に関しては、博物館や展示室の入り口に消毒液を設置し、たいけんの広場などでは資料に触れる展示（ハンズオン）を中止し、代わりに資料展示をしました。また、ライブラリーでは、コピー作業をいままでもセルフサービスとしていたものを職員が行い、十二時から十三時までを休止時間としています。



シアターは1人おきに座るようにした

イベントについても夏ごろから感染拡大に注意しつつ、再開しています。例えば、たいけんプログラムは七月から徐々に再開して、参加者にはアルコール消毒や検温、連絡先の記入を行ってもらい、万一の場合に備えています。講座も同様で、座席を指定してソーシャルディスタンスを保ち、連絡先の記入をしてもらっています。



講座ではアクリル板設置や座席指定を実施

みなとびあは、新型コロナウイルス感染拡大の下でもなるべく活動を維持し、インターネットを利用した新たな試みを行うなど、できる限り市民へ活動を還元できるように努めてきましたが、その中でいくつか課題もみえてきました。

例えば、インターネットを利用した試みでは、「古文書クイズ」難易度の

設定が難しかったということがあります。参考にさせていただいた柏書房のツイッターの場合、辞書用に作製された一文字ずつの平仮名のくずし字を、自由に組み合わせることで、文字の読みやすさを調整して出題していましたが、みなとびあの場合は既存の古文書から出題するので、文字の読みやすさや古文書の内容を勘案すると出題できる内容がかなり限定されました。

また、ツイッターでは「ツイート」に対し、返事を書くことができる「リプライ」は基本的に誰でもみることができ、利用者の交流の一端になるものです。しかし、この機能を使い、「くずし字クイズ」の答えが出題後すぐに書き込まれてしまい、その後の人に答えが分かってしまうなど想定外のことも起こりました。双方方向にコンテンツを楽しんでもらうことの難しさを実感しました。新型コロナウイルスの感染拡大により、引き続き県内外での人の動きが制限される中で、インターネット上での情報発信をどう行っていくか考える必要があります。

博物館への来館が制限されることで、実物資料のサイズ・材質の感覚を体感してもらおう展示の観覧や、昔の遊び・仕事の技法などを体験するたいけんプログラムなど、博物館ならではのコンテンツを利用者が楽しむ機会が失われています。また、みなとびあで大切にしてきたボランティア活動など市民交流の機会も大幅に減っています。例えば、インターネット上で動画を置いて展示紹介をしたり、市民

交流の機会を設けたりといったことも考えられますが、やはり実際の来館に勝るものは無いように思います。

みなとびあの昨年度の状況をみますと、「にいがたの昭和」展が平成二十七年以来、来館者一万人を超える好評を博しました。みなとびあの来館者は、これまで県外からの観光客が多くを占めていましたが、現在のような状況下において、来館者数が新潟市民（あるいは県民）に支えられたものと考えられます。このことは、企画展などの事業テーマを再考することで、地元の新潟市民を主とした潜在的なニーズを掘り起こせる可能性を示していると思います。

新型コロナウイルス感染拡大を、一日も早く終息させることが第一目標であるべきだと思えます。その中で、みなとびあは何ができるか、手探りしながら、これからも活動を続けていきたいと思えます。

（たじま ゆうすけ 学芸員）

ここからアクセス！

